

## 漢方薬・生薬認定薬剤師研修制度

小林資正

Motomasa KOBAYASHI

日本生薬学会漢方薬・生薬認定薬剤師研修委員会委員長、大阪大学薬学研究科教授

### 1 はじめに

和漢生薬などの世界各地の天然薬物は、多くの動植物の中から人体への適用を経て有効なもののみが取捨選択され現代に伝承されてきた。また、天然薬物の有効成分から数多くの現代医薬が開発されており、天然薬物は現代医薬のルーツであり、人類の貴重な財産といえる。また、生薬を組み合わせた処方を用いて治療する漢方は、今日の医療の一翼を担っている。2009年6月には約半世紀ぶりに改正薬事法が施行されて、新しい一般用医薬品販売制度が始まった。医薬品の安全な供給を確保するために、情報提供時の対面を原則とする新販売制度においては、漢方薬を販売する際の規則がやや強化されたことも一因となり、漢方薬・生薬認定薬剤師を目指す薬剤師の数が増加している。

### 2 薬学部における漢方薬学教育

現在の医学領域では、ほとんどの大学で漢方医学が必須科目となり、8割以上の医師が漢方薬を日常的に処方しているという。薬学部では、従来から生薬学系教科の中で漢方薬について教えられてきたが、2006年度から始まった6年制薬学教育において、漢方薬学を必須科目としている大学はまだ少ない。

これまでの薬学教育における生薬学では、生薬に含まれる薬効成分の化学構造と薬理作用についての講義が中心であったが、薬剤師は漢方処方の薬能や添付文書の「効能・効果」や「使用上の注意」といったことも知っておかなくてはならない。セルフメディケーションでは、薬剤師は相談者が訴える症状の背景にある病態を推察し、医療機関での受診を勧告するか、適切な一般用医薬品(西洋薬)を選択し

て相談者に提案するか、漢方薬を勧めるか、を判断する必要がある。

日本薬学会がまとめた薬学教育モデル・コアカリキュラムの一般目標の1つに、「現代医療で使用される生薬・漢方薬について理解するために、漢方医学の考え方、代表的な漢方処方の適用、薬効評価法についての基本的知識と技能を習得する」がある。しかしながら、これまでの薬学教育のカリキュラムの中では生薬学関係の講義の時間数は限られており、薬剤師の多くが漢方薬や生薬について十分な知識のないままで医療現場に送り出されていたのが現実である。現在の医療現場におけるニーズと薬学教育とのへだたりを反映してか、大学の卒後教育のテーマとして最も希望が多く、盛んに実施されているのが漢方に関する研修会であると聞く。

### 3 漢方薬・生薬認定薬剤師研修制度の概要

このような社会的背景をもとに、漢方薬・生薬認定薬剤師研修制度は、大学教育で不足している漢方薬と生薬の知識を補い、更に日進月歩する本学問領域の新しい知見を伝えるために、日本薬剤師研修センターと日本生薬学会とが協力して2000年度に立ち上げられた。6年制薬学教育制度施行のための法律改正が行われた2004年を境に、薬剤師が自らの資質向上を目指す意欲が急速に高まってきている。漢方薬・生薬認定薬剤師制度での認定者数もこの11年間で受講者が延べ5,435名に達し、2011年3月現在の有効認定者数は2,184名となっている。現在の有効認定者の年齢別分布と職業別分布を図1に示す。年間の受講者数および認定証発行数も年々増加しており、2009年度には770名が受講するなど、本認定制度は薬剤師の生涯教育における確固たる位置を占めるようになった。

研修会は月1回ペースで全10日間のコースと

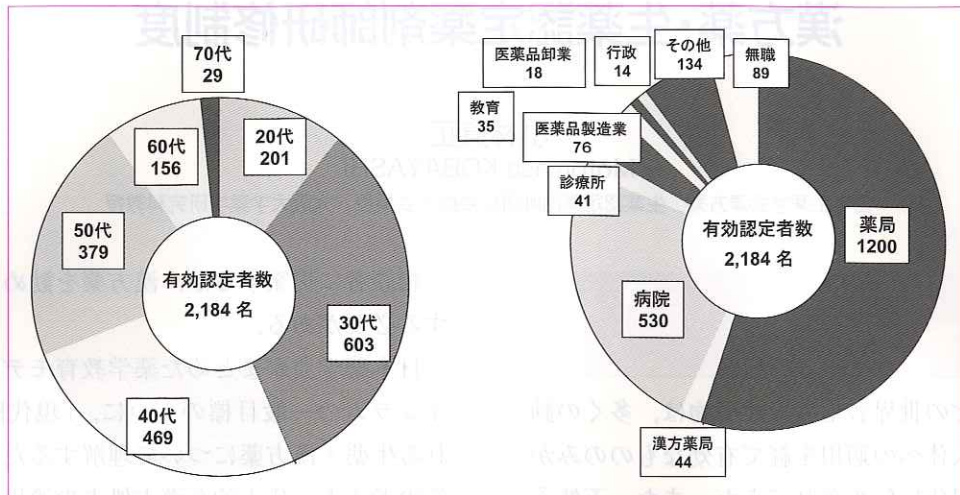


図1 年代別および職業別の漢方薬・生薬認定薬剤師数



図2 漢方薬・生薬認定薬剤師の認定と認定更新

なっており、1回70分での全45講義を9日間で受講するとともに、春期もしくは秋期には全国各地の薬系大学等の薬用植物園約40か所の協力を得て、植物園での実習も実施している(図2)。講義は東京で開催される座学講義の他に、座学講義の収録ビデオをビデオ講義として各地で受講することができる。研修講義を受講した後は、認定試験が課されており、試験に合格した者だけが3年間の有効期限付きの漢方薬・生薬認定薬剤師証が交付される。本学問領域の最近の急速な進歩と医薬行政の変化に対応するためには、専門知識の維持更新が必要であることから、この認定制度には更新制度が設けられている。更新のためには、毎年開催される関連学会や

講演会、講習会等の各研修会に参加して所定の単位を取得することが課されてきたが、今年度より、最小限の単位を取得し、認定試験を再受験して合格すれば、3年間の認定更新を申請することができるようになった。

#### 4 研修会における講義内容

漢方治療において使用される医療用医薬品および一般用医薬品は、漢方薬と総称される。原則的には、日本薬局方や日本薬局方外生薬規格集に記載されている複数の生薬から構成される漢方処方薬(方剤)のことを示す。また生薬とは、草根木皮と呼称

される植物を中心に、幾つかの動物や鉱物を含めた天然由来の薬用材料をそのまま、もしくは乾燥させたもの、あるいは修治といわれる加工処理を施したものである。西洋医学とは全く異なる医療体系や理論を基盤とする漢方医学においては、独特の診断と治療方法に従って漢方薬が処方される。薬剤師は、漢方医学の考え方や特徴をはじめ、代表的な漢方処方の適用法を習得して、服薬指導をすることが求められる。主な研修内容として、1)漢方の歴史、2)漢方概論、3)傷寒論の解説、4)疾患別の漢方治療と処方解説、5)漢方薬の薬理作用、6)漢方薬の再評価、7)漢方薬の副作用、8)病院調剤と漢方薬局製剤、9)医療用漢方製剤と保険診療、10)中医学と漢方医学の違い、11)漢方各論(1.免疫・アレルギー、2.代謝・内分泌疾患、3.消化器疾患、4.認知症、5.婦人疾患、6.老人疾患、7.漢方診療の諸疾患)、などの項目がある。

また、日本で栽培・生産されている生薬はごくわずかであり、その大半は中国などからの輸入に頼っている。個々の生薬の品質が漢方処方の薬効を左右することから、生薬の良否や真偽といった品質に関する知識は非常に重要であり、また、残留物や異物混入などの安全性の情報も必須といえる。一方、野生品の採取による自然破壊防止やワシントン条約による希少動植物の保護などの地球環境の保全のためにも、生薬資源の生産と流通についての情報も必要である。

天然薬物を用いた治療を指導する薬剤師に必要な知識としては、漢方薬の他に近年身近となっている西洋のハーブ類や天然物由来の健康食品等がある。ヨーロッパの伝統的な植物(ハーブ)療法のほか、米国における医療においても、多くの人々が民間療法的な herbal medicines をセルフメディケーションとして用いている。例えば、脳血管循環を促進するイチョウ葉エキス製剤、免疫強化剤エキナセア、排尿障害に治療効果を示すノギリヤシ、抗うつ病作用を示すセントジョーンズワートや、抗疲労・健康回復剤としての朝鮮人参などのエキス製剤が医薬品として開発されている。最近我が国においてもこの種の植物製剤が盛んに輸入され、あるいは国内で生産されるようになったが、その多くが健康食品やサブ

リメントとして薬局でも取り扱われている。最近の分析技術や薬理研究の進歩により、生薬や漢方処方の有効成分間の相互作用や吸収・代謝、消化管内での構造変化などについても明らかにされてきており、生薬と漢方処方を成分・物質レベルで科学的に理解し説明できることが薬剤師に求められている。上記に関連した研修内容として、1)薬局方の生薬規格、2)生薬の流通と生薬製剤、3)生薬の鑑定、4)生薬の修治、5)生薬成分の化学、6)生薬の薬理作用、7)食薬区分とサプリメント、8)麻薬植物と脱法ドラッグ、などの項目がある。

## 5 おわりに

近年、長い歴史を持つ漢方薬・生薬の分野においても、新しい科学情報は増大し続けている。しかし、大学での講義や演習は、基礎の部分に止まっているのが現状である。そのため薬剤師の多くが、生薬や漢方について十分な知識のないまま医療現場に送り出されているといっても過言ではない。このような現状を改善するため、日本薬剤師研修センターと日本生薬学会が共同で発足させた「漢方薬・生薬認定薬剤師制度」は、薬剤師が自身で漢方薬学や生薬学を学習する制度である。この分野で指導的な役割を果たせる薬剤師であるためには、伝統的な漢方医療と伝統薬物についての十分な知識を身につけ、代表的な漢方処方の適用法を習得して、服薬指導ができるだけの能力を備えていることが期待される。

漢方医学は、中国伝統医学を基にして日本において幾多の変遷を経て、今日まで独自の発展を遂げてきた日本固有の伝統医学といえる。医療制度の重点が高齢者の健康維持や疾病予防に移ってきている今日、薬剤師がこの分野で指導的な立場を果たすことが求められており、漢方薬・生薬認定薬剤師の重要性はますます増大するものと思われる。

### 参考文献

- 1) ファルマシア, “薬学と漢方 47(5)”, 2011.
- 2) 漢方薬・生薬認定薬剤師研修制度 <http://www.jpec.or.jp/contents/c16/index.html>